

李箱の日本語創作ノートと朝鮮語による語りなおし——成川紀行関連文を中心に

相川拓也(東京大学 博士課程)

1 はじめに

李箱(1910~1937)は1931~1932年の日本語詩など一部を除けば、基本的に朝鮮語による作品を発表し続けた作家である。李箱の死後、親交のあった作家らによって、遺稿として「失花」(『文章』1939年3月号)のような重要なテキストが発表されもしたが、植民地期間に発表されたそれらの遺稿もやはり、全て朝鮮語である。

こうした状況に変化が訪れるのは、1960年に李箱のもものとされる日本語の文章が書かれたノートの存在が明らかになってからのことである。このノートは、李演福^{イ ヨンボク}という青年から批評家の趙演鉉^{チョ ヨンヒョン}に手渡されたもので、内容を調査した趙演鉉によって李箱の真筆と認定され、以後断続的に、このノートに記された文章が、趙演鉉主幹の『現代文学』など韓国の文芸誌に韓国語翻訳の形で発表されることになる¹。だが、趙演鉉から直接ノートを見せてもらったという金丘庸^{キム グ ヨン}がこのノートの目次を作成したものが資料として残されてはいるものの、現在このノートは行方不明となっており、日本語の原文は、写真版が残されたごく一部を除いて、確認することができない²。

李箱の日本語ノートをめぐっては、現状こうした資料的な限界がある。このノートに記された原稿を李箱が生前に発表しなかったことから、これらは創作のための草稿や習作にあたるテキストだったのだろうと推察される。これらの点は勘案しなければならないが、特に散文において朝鮮語の世界で活動していた李箱の創作の過程に、日本語という異言語が介在していたことを示している点で、このノートは重要であるに違いない。とりわけ、これらの草稿が、李箱が1935年に行った平安南道成川^{ピョアンナム ト ソンチョン}への旅行と深い関わりを持つ点が注目される。

李箱は成川への旅行経験を題材に、「山村余情：成川紀行中の幾節」(『毎日申報』1935年9月27日~10月11日)と「倦怠」(『朝鮮日報』1937年5月4日~12日。遺稿、東京で執筆)という2つの朝鮮語テキストを残している。そして、李箱の日本語ノート(以下、「創作ノート」)には、この2篇の下書きとなったであろう文章が数篇含まれているのである。李箱の成川旅行やそれによって生まれたテキスト群についての先行研究は数多い。李箱の成川経験について最も網羅的に整理した金宙鉉^{キム ジュヒョン}は、成川旅行の内実を残されたテキスト、および近い人々の証言から可能な限り実証的に検証するとともに、「山村余情」と「倦怠」の朝鮮語表現における特徴を、それぞれ隠喩と換喩という形で整理し、成川経験が契機となった李箱によるモダニズム的修辞学の成就として位置づける³。李京埴^{イ キョンフン}は、「山村余情」のテキストの修辞学的特徴に、「植民化を尖鋭的に実践する主体であり、その植民化の対象でもある1人の文学士⁴」という植民地モダニストとしての李箱の微妙な位置を読み取り、そうした自己の立ち位置を脅かす東京という宗主国の首都に対する一種の防衛機制として、「倦怠」というテキストが生み出されたと論じる。また方珉昊^{パン ミノ}も、李箱の成川関連テキストを「山村余情」と「倦怠」の2つの系列に分類し、死地東京で書かれた「倦怠」に結実する李箱の世界認識を思想的に跡づけている⁵。

本発表での試みも、こうした先行研究の延長線上に位置づけられる。すなわち、李箱の創作ノートに残された文章と、「山村余情」および「倦怠」の2つのテキストとを対照させながら、その表現の特徴と意味を探る作業

1 ノート発見経緯については、趙演鉉「李箱의 未發表遺稿의 發見」『現代文學』1960年11月号、163頁参照。

2 日本語遺稿ノートの現状、金丘庸作成の目次、および韓国語翻訳の問題については、박현수「이상 시학의 밀실로 가는 열쇠, 「애야(哀夜)」」이상문학회 편『이상수필작품론』서울:역락, 2010年を参照。

3 김주현「이상 문학에 있어서 성친 체험의 의미」『한국근대문학연구』第2巻第1号、2001年。

4 이경훈『이상, 칠천의 수사학』서울:소명출판, 2000年、314頁。

5 방민호「‘돌아갈 수 없는 방랑’의 근거와 논리: 이상의 수필 「권태」」이상문학회 편, 앞의 책。

である。先述のような資料的限界はあるものの、テキストの対照の際、可能な場合には写真版を元に日本語原文を復元して利用することとする。そのうえで、創作ノートに草された表現を、朝鮮語によって語りなおす(再び書く)という創作の現場で行われる操作に着目し、分析を行いたいと思う。

2 「山村余情」——意識されるモダン

李箱の成川旅行は1935年の8月下旬から10月にかけて行われたとされる⁶。その成川滞在中に書かれ、京城の毎日申報社へと送られた原稿が、9月27日～10月11日にかけて連載された「山村余情」である。李箱のこの旅行の背景には、彼自身の失恋やカフェ経営の失敗、家族の困窮からの逃避といった動機があったと言われ、こうした経験は成川関連のテキストが持つトーンにもある程度の影響を与えていると思われる。

創作ノート所収の「第一の放浪」冒頭部は、その旅の出発を描いている。そこには、汽車に乗り合わせた男に対する書き手「私」の不快感が次のように書かれている。

久シ振りデ歸ツテ来タ京城ハナツカシモノダト〔「彼」は〕云フ。京城ヲ離レタクナイ。カフェ、ソシテ脂粉ノ香りモ豊カナバー等ハ實ニ身ニ沁ミテイハト云フ。通化〔旧満洲国、現在の中国・吉林省にある市。文中の「彼」の勤務先がある〕ハ田舎ダカラ 娛樂機関——彼ノ言葉ニ從ヘバ——ナンカテンデナイノ寂シイト云フ。

私ハ彼ノ言葉ニ——頷イテ見セタ。實〔ママ〕私ハソノ方面ノコトハヨク知悉シテ居相デチツトモサウデハナイノdealガ 彼ハ頻リニソレ等ニ関スル固有名詞ヲ数ヘ上ゲテハ私ヲ吃驚サセタリ 又引イテハ斯界ノ従業者deal私ヨリモスノ如ク多クヲ知ツテイルト云フコトヲ見セビラカスコトニ依ツテ彼ノ生来ノ道楽好キナ性分ニ如何ニ甘ダルイ優越感ヲ感ジ様ト云フ魂膽dealラシイガ 私ハ又私デ實ノ所彼ノ色々ノ物語ニ素直ニ敬意ヲ表シナイ訳ニハ行カナイノデアツタ。

〔……〕

家ヲ立ツ時、私ハ駅デ 又汽車ノ中デ誰ニモ遑ハナケレバイト思ツタ。幸ヒ駅ニハ誰モイナイ。私ノ知ツテイル人ハ誰モイナカツタ。私ノコノ訳ノ分ラナイ旅ニ付テ言訳ヲスルノハ本當ニ私ニ苦シイコトdeal。私ハ汽車ノ中デ誰ニモ会ハナイトイト願ツタ。⁷

京城を象徴する「カフェ」や「バー」といった「娛樂機関」について語る「彼」の言葉に、「私」は気圧されつつも嫌悪感を抱く。「コノ訳ノ分ラナイ旅」について、「私」は京城の誰にも語ることを望んでいないが、そうした「私」に「彼」は、「旅ハ道伴レ」などと言いながら絡んでいく。「私」は疲労に苛まれ、「モウロヲ喊〔「緘」の誤記か〕ンデイルヨリ外ハドウスルコトモ出来ナカツタ⁸」と書き付ける。

このような京城への嫌悪感によって「私」の旅の出発は彩られていたわけだが、成川での滞在は、「私」の故郷である京城への懐旧の念を呼び起こしたようである。同じ「第一の放浪」の末尾の部分では、「私」の机の上に舞い降りてきた1匹のコオロギに、次のように語りかける。

このコオロギはひどい厭世家なのかもしれない。ランプの位置はともするとその華麗な自殺場所として選

6 詳しい旅程の推定については、김주현, 앞의 글, 82~84頁を参照。

7 김윤식 『이상 문학 텍스트 연구』 서울: 서울대학교출판부, 1998年, 450頁, 原文日本語。〔〕内は相川による註記および中略。仮名遣いは原文ママ。李箱の日本語テキストに関しては以下同じ。

8 同前。

定されたのではないか。

[……]

死んではいけない。ソウルへ帰れ。ソウルはいま秋ではないか。そしてツクツクボウシたちがみないつせいに美しい声を出して歌う季節ではないか。

ソウルでは誰もお前を待っていないということか。それでもいい。とにかくお前はソウルへ帰れ。そして歌ってみるのだ。そうして前とは違う意味での生の新たな意義と光明を発見するのだ。考案してみるのだ。⁹

「ソウル」で発見されることが期待される「前とは違う意味での生の新たな意義と光明」という表現に、書き手「私」の心情が率直に投影されているとあってよいだろう。創作ノートに書かれたものの中で、旅の出発から成川での感懐までを描いた、現存する最もまとまった文章である「第一の放浪」は、このように、「私」の心情や内面を比較的直截に書いたテキストであると言える。

一方、朝鮮語による「山村余情」は、成川から京城へと原稿を送るという行為そのものに触発されたかのような形式的特徴を備えている。つまり「山村余情」のテキスト全体は、「都会」にいる「鄭兄」^{チョン}に宛てた手紙という設定で書かれているのである。その書き出しは以下のとおりである。

香り高い MJR〔「MJB」(コーヒーの銘柄)の誤植〕の味覚を忘れてから二十余日にもなります。ここには新聞もあまり来ず、逡伝夫は時折『ハトロン』色の便りを持ってきます。そこには繭やトウモロコシのことが書かれています。村の人々は遠く離れて暮らす一家のために愁心が起こったようです。私も都会に残してきたことが心配になります。¹⁰

書き手「私」は、コーヒーの「味覚を忘れてから」すでに久しいほどの期間を、成川で過ごしていることになっている。この書き手によって、成川は新聞や郵便など近代の情報メディア網の辺境、コーヒーの「味覚」に象徴される「都会」的なものから遠く隔たった場所へと位置づけられる。だがその情報メディア網の辺境に「時折」もたらされる「便り」は、村の人々とともに「私」にも、「愁心」や「心配」を起こさせるきっかけとして作用する。その「愁心」への応答として「私」は、「『パラマウント』会社の商標のような姿の都会少女が出てくる夢を少し見ます。それからいつの間にか、都会に残してきた貧しい家の者たちを夢に見ます¹¹」と、郵便というメディアを利用して「都会」へと書き送り返すのである。こうしたテキスト編制上の設定は、創作ノートに残された文章には見られない。「第一の放浪」に見られた、コオロギに仮託した心情の吐露とは違い、「山村余情」では、「(京城)や「ソウル」などの固有名を持たない)「都会」への書き手「私」の「愁心」が、テキストの形式そのものによって構造化されているのである。

次に、「山村余情」の表現上の特徴について見てみたい。すでに引用した部分でも容易に気付かれるように、また多くの論者が指摘するように、「山村余情」というテキストは、農村を描いたものであるにもかかわらず、「都会」的で(当時の流行語で言うところの)「モダン」な語彙が頻出する(それらの多くは、初出紙面において『』が付されている)。カボチャの花に寄ってくるミツバチは「『スパルタ』式」で、その色は「『セシル・B・デミル』の映画のように華麗」なうえ、羽音は「『ルネッサンス』応接室で聞こえる扇風機¹²」にたとえられる。「初物のキムチの清新な

9 李箱(柳呈 訳)「첫번째 放浪」『文學思想』1976年7月号、198～199頁。韓国語訳より相川が再翻訳。

10 李箱「山村餘情: 成川紀行中の 몇 節」김주현 주해『증보 정본 이상문학전집』3, 서울: 소명출판, 2009年、45頁。

11 同前、47頁。

12 同前、49頁。

味覚」は「眼薬『スマイル』を連想させ¹³⁾るものとなり、村の乙女たちは「『ココア』色の唇」をし、「『ハترون』色の」光沢を持つ、「M百貨店の『ミソノ』化粧品の『スウィートガール』が履いていた靴下」と「まったく同じ小麦色¹⁴⁾の肌だと描写される。

こうした表現は「山村余情」の際立った特徴だが、創作ノートの中の「愚かな夕飯」(原文不明。韓国語題は「어리석은 夕飯」)でも類似の表現が一部試みられている。食後、道路に面した家の大庁(板の間)に村の人々が集まるさまが「開港場」にたとえられ、彼らの醸し出す喧騒は「豪華なスポーツだ¹⁵⁾と語られる。さらに、「日光の下でコードバンのように村の処女の皮膚は艶々と光った¹⁶⁾という表現も見られる。「山村余情」での過剰なまでの「都会」的の比喩表現は、「愚かな夕飯」での試みを徹底させたものと言えるだろう。この語りなおしにおける言葉の操作は、「書く」という行為を前景化させる手紙というテキスト全体の設定と組み合わさることで、「書く」主体として常に「都会」的な言葉を召喚せずにはおれない「都会」人としての書き手「私」の存在を浮かび上がらせる。

この「都会」人としての書き手の主体性と関連して、「山村余情」によって李箱が「朝鮮で生まれ植民地的に教育を受けた、多重言語的な都市に居住する作家という彼の個人的アイデンティティを開拓した¹⁷⁾というジョン・フランクルの指摘は検討に値する。確かに、活動写真会のため広場に集まった村人たちについて「蓄音機の前で首をかしげる北極の『ペンギン』鳥たちと何が違うのでしょうか¹⁸⁾と書き、「愚昧な百姓たち¹⁹⁾と彼／彼女らを呼んでばばからない書き手「私」の言葉は、村人たちとの間に見る／見られる、そして描く／描かれるという表象行為をめぐる一方的な関係があることを前提としている²⁰⁾。そして、こうした表象の力学の中で「都会」的の言葉の数々を撒き散らすエクリチュールには、植民地のモダンに深く侵食された書き手の意識のありようを見て取ることができる。だが、これが書き手の「個人的なアイデンティティ」というレベルに留まるものであるかどうかは、問い直す必要があるだろう。

「山村余情」は、村の活動写真会を描いた部分を中心に、成川の近代的な側面をわずかながら伝えている。これは創作ノートに残された文章でも同様である。特に注目されるのは、「愚かな夕飯」の次の一節である。

だがその中でも白面の青年がいて、この村落の崇高な教養を攪乱する。軽蔑すべき輩だ。そういう白面たちはナイトガウンを着もし、頭にポマードを塗りもし、ヴァイオリンを弾きもし、新聞を読みもして、村人を面喰らわせる。²¹⁾

先に見た「第一の放浪」で京城の「娯楽期間」の話聞かせてくる男と同様、この文章の書き手も、農村にあってモダンで「都会」的なものに近付こうとする「白面の青年」に対する「軽蔑」を隠さない。しかし「山村余情」では(そしてこの後に見る「倦怠」でも)こうした「白面の青年」の存在は消去されている。そのかわりに見られるのは、「生徒たちは文を習っています。彼らは熱心に簡単な算術をやって、彼らの正直と淳朴を智慧と狡猾で換算して

13 同前、52頁。

14 同前。

15 李箱「어리석은 夕飯」『現代文學』1961年1月号、253頁。韓国語訳より相川が再翻訳。

16 同前、260頁。

17 존 프랭클(이경훈 역)「영역 표시: 민족적 정체성에 대항하는 「산촌여정」의 글쓰기」이상문학회 편, 앞의 책, 20頁。

18 「山村餘情」、57頁。

19 同前。

20 広場の群衆の1人として自分を俯瞰した上で「勿論私もその愚昧な百姓の中の1人であるほかないのですが」(「山村餘情」、58頁)と書き添えていることも、こうした関係性があるからこそその表現だと言えるだろう。

21 「어리석은 夕飯」、254頁。

います。嘆息すべき利息算ではないでしょうか²²」という簡易学校(2年制の初等教育機関)の生徒たちに関する記述や、「私のいる向かいの宿には都会風の女人も来たようです²³」といった報告である。ここで書き手「私」は、こうしたいわば教育水準や階級、そしてジェンダーの面で、「私」の「都会」性を脅かさない存在のみを書くという語りなおしの戦略によって、村人との間の表象をめぐる関係性を維持しようとしている。「嘆息すべき」という生徒たちに向けられた言葉は、書き手が一方的に農村を眺め、価値付けしうる位置にあることを誇示する性質のものだと言える。

そして、「山村余情」というテキスト全体が、「鄭兄」という宛先を明示した手紙という形式になっていることをやはり考慮しなければならない。この設定は、書き手が村人との間に一方的な表象関係を構築することを志向する中で乱発する「都会」的な言葉や表現が、それによって意思疎通が可能な相手に向けて書かれているということの意味する。このことは、テキスト中で「鄭兄」あるいは「都会に残っている幾人かの孤独な『ファン』²⁴」と名指される都市の知識人(男性)同士のヴァーチャルな共同性を、このテキスト自体が構築しようとしていることを意味するだろう。言い換えれば、「山村余情」は、書くという行為によって「都会」と「山村」とを対形象化し、「都会」の言語を解釈することができるヴァーチャルな共同性の中に書き手を位置させようとするメディアとしてのテキストだ、ということだ。そして、日本語からの語りなおしによって生まれたこの「都会」の言語の過剰さは、朝鮮の「山村」から自分自身を常に差異化しなければならないという強迫観念に囚われた、植民地知識人の意識のありようを暴露するものともなっているのである。

3 「倦怠」の極

李箱は1936年の秋に東京へ渡り、東京という都市に対する大きな幻滅を味わうことになる。本発表の前半でそのごく一部を検討したが、李箱の東京での経験と、ほかならぬその東京で「倦怠」が書かれたことの意味は、李箱研究の1つの重要なトピックであり続けている。李箱の東京経験についてここで詳論する余裕はないが、やはりここでも、「倦怠」と創作ノートの記述とを対照させてみることで浮かび上がる、語りなおしにおける言葉の動きとその意味について考えてみたい。

「倦怠」は、李箱の遺骸が朝鮮に帰るのを期して『朝鮮日報』に発表された遺作である²⁵。テキストの末尾には「十二月十九日未明、東京にて²⁶」と記されており、このテキストがある結末を持つ、1つの作品として書かれたということが推定される。そしてこのテキストを書く行為が行われた時間と場所の表示は、テキストの内容と関わって、この書く行為が持つ重要な問題を明らかにする。つまり、「僻村²⁷」(「成川」とは明示されない)にいる「私」を東京にいる「私」が描く、というテキストの成り立ちが、「文の主語としての「私」と、その文を書き綴る行為の主体としての「私」との分裂を、[……]テキスト全体の形として明示している²⁸」ということだ。この、書く主体と書かれる対象との分裂が作用することで、「倦怠」の文体は、創作ノートに残された文章や「山村余情」のそれと大きく異なる

22 「山村餘情」、56頁。

23 同前、57頁。

24 同前。

25 発表経緯については『朝鮮日報』1937年5月9日参照。

26 李箱「倦怠」김주현 주해, 앞의 책, 128頁。

27 同前、115頁。

28 小森陽一「自意識過剰からの出口: 李箱の文学における言葉の切っ先」崔真碩編訳『李箱作品集』付録、東京: 作品社、2006年、8~9頁。

ものになっている。

次の引用は、創作ノートに収められた「コノ子ラニ玩具ヲ与ヘヨ」という文章の一部である。

私ハ海洋ノ様ナ退屈ノ中デ泳イデイル。鱈ハ微温ノ中ニアル。

子供ラガ叫ビ声ヲ拳ゲ乍 コノ私ノ假睡状態ノ退屈ヲ踏ミニジツタ快イマドロミヲ根コソギニ〔糸遍に覚。「攪」の誤字か〕乱シテシマツタ。私ハ吃驚シタ。二三人ノ赤茶化タ男ノ子ラシク見ヘル子供達ガ私ノ佇ツテイル傍デ遊ンデイルノデアル。暮色ガ彼等ノ死屍ノ様ナ不潔ヲ蔽色マント〔「つつまんと」か〕シテイル。²⁹

「退屈」の中を泳ぐような「マドロミ」あるいは「假睡状態」から、遊ぶ子供たちの気配によって目覚めさせられた「私」は、「彼等ヲ吃驚サセル様ナ特異ナモノ」が何もなく、「スベテニ飽イテシマツテ」「無意識ニ途方ニクレテ³⁰」いる子供たちを観察する。子供たちは「両手ヲ差延バシタリ跳ネ廻ツタリ 一ヶ所ニ踏止ツテ体ヲヒネラセタリ」という「全く律動的デナイ仕草」や、「何レノ品詞ニモ属シナイ奇妙ナ叫声ヲ拳ゲテ殆ンド自棄ニ騒ギ立テ³¹」る。こう書き留めて「私」は次のような所感を述べる。

イツ迄至〔「経」の略字〕ツテモ コノ子ラハ コノ馬鹿ノシイ遊戯ヲ已メナイ。オヤコレデコノ子ラハ本当ニ發狂スルノデハナカライカ。

退屈 所在ナサ ト云フモノハ致命的ナ負傷ヨリモ 人間ニ取ツテ尚ホ致命的デアラシイ。現ニ私自身ヲ見ヨ。私ハ或ハ内部ニ於テ既ニ助カラナイ程度迄ニ發狂シテイナイト 誰ガ保□□□様〔数文字判読不能。該当部分の韓国語訳は「保證하겠는가(保証するだろうか)³²」?〕³³

ここで書き手は、「退屈」や「所在ナサ」が「人間」を「發狂」に至らしめると、子供たちから「私」自身の「内部」へと視点を移動させて書いている。こうした記述によく似た部分は「倦怠」にも見られる。「倦怠」では、村の風景やそこで暮らす村人の一生が「単調な倦怠一色で塗布されたもの³⁴」だとされ、子供たちも「私のように一挙手一投足をどうしたらいいのか戸惑っている倦怠たち³⁵」と名指されている。それに対して創作ノートでは、原文が確認できる限りでは、「倦怠」という語が用いられていないことに注意したい。次の、創作ノートにある「夜色」という文章の一節でもそれは同様である。

一度ニコンナニ多クノ星ヲ見タコトハナイ。寧ろ恐怖ニ近イモノデアル。月ノナイ夜空ハ底^マハイモ知レナイ鬼氣ヲ湛ヘテ一大音響ノ中ニイルカノ様デアル。村人ノ食後ノ雜鬧ヲ遠耳ニ聞キ 時々コノ尨大ナ恐怖ニ脅ヘ乍空ヲ仰イダ。

[……]

夜色ハ退屈ナ景色ヲバー層退屈ナ混然タルモノニシテシマヒ ソノ上 何ノ役ニモ立タナイ尨大ナ恐怖ノ芝畠〔判読困難〕ヲ内藏シテコンナ愚昧ナ自然ニ対シテ私ハイツ迄タツテモ毛ノ先程ノ親密サヲサハ發見スルコトハ出来ナイ。³⁶

29 김윤식, 앞의 책, 459頁, 原文日本語。

30 同前。

31 同前。

32 李箱「이 兒孩들에게 장난감을 주라」『現代文學』1960年12月号, 177頁。

33 김윤식, 앞의 책, 459頁, 原文日本語。

34 「倦怠」, 118頁。

35 同前, 122頁。

36 김윤식 엮음『李箱문학전집』3, 서울: 문학사상사, 1993年, 340頁, 原文日本語。

こうした記述は、「倦怠」では例えば次のように語りなおされている。

中庭で飯を食べると、頭の上であの無数の星々が騒ぎだ。あれはまたどうしろということか。私には星は天文学の対象たりえない。そうかと言って詩想の対象でもない。それはただ香気も触感もない絶対倦怠の、到達しえない永遠の彼岸だ。星さえがこのように味気ない。³⁷

ここでも、「夜色」に描かれるのは夜の闇に沈んだ「退屈」な「光景」であり、「倦怠」での夜空の星は手の届かない「絶対倦怠」の「永遠の彼岸」であると書かれる。創作ノートの韓国語訳では、ここまで指摘した「退屈」という語は全て「倦怠」あるいは「권태」と訳されている。これら以外の、日本語原文を確認することができない箇所でも「倦怠／권태」と韓国語訳された部分がある以上³⁸、あくまで仮説に過ぎないが、李箱は東京で「倦怠」を書くにあたって、この「倦怠」という語をかなり意識的に選択した可能性がある。それほどまでに「倦怠」というテキストでは、様々な表象が「倦怠」という語に覆われて登場するのである。

「倦怠」というテキストにおいて、「倦怠」という語は単なる精神状態を表すのみならず、先の表現のように景色にペンキさながら「塗布」されたり、「倦怠たち」あるいは「倦怠の矮小人間³⁹」のような村の子供たちの呼び名に使われたり、「終わりのない倦怠が人を掩襲⁴⁰」したりするものとして存在する。さらには、「牛は食欲の楽しみすらを冷待することのできる地上最大の獣怠者だ。どれほど倦怠に押し潰されて、すでに胃に入ってしまった食べ物をまた吐いて、そのすえた渋みのある半消化物の味覚を逆説的に享楽するふりをしてみせるのだろうか⁴¹」というブラック・ユーモアの材料にさえなっている。

こうした言葉の使い方は、“ennui”というフランス語の訳語として大正期以来の日本の知識界で流通した「倦怠」という漢語⁴²を、その用法や意味が揺らぐ程度までに濫用することで、そこに付きまとうデカダンスの情緒や雰囲気や戯画化する効果を持つものとも言えるかもしれない。事実、「倦怠」というテキストの書き手は、「山村余情」の書き手が自らを位置づけようとした、植民地モダンという解釈共同体とは違う場所にいる。

現代人の特質であり疾患である自意識過剰は、こうした倦怠せずにはおれない倦怠階級の徹底した倦怠によるものだ。肉体的閑散、精神的倦怠、これを免れられない階級が、自意識過剰の絶頂を表示する。

しかし今、この小川のほとりに座った私には、自意識過剰すらが閉鎖された。

こんなに閑散としているのに、こんなに極度の倦怠があるのに、瞳孔は内部に向かって開くことを躊躇する。⁴³

「現代人」、あるいは「山村余情」での「都会」人を「倦怠階級」と対象化した上で、もはや「私」の身体（「瞳孔」）が、その「階級」に相応しい働きをしない、ということがここで語られている。「極度の倦怠」にもかかわらずそれが「自意識過剰」という病へとつながっていかない「私」の1日は、「あらゆるものから絶縁された今の私の生活――

37 「倦怠」、127頁。

38 たとえば、「愚かな夕飯」には「이 倦怠 바로 그것인 土地(この倦怠まさにそのものの土地)」という表現が見られる。「어리석은 夕飯」、254頁。

39 「倦怠」、126頁。

40 同前、121頁。

41 同前、124頁。

42 熊谷孝はある対談で、芥川龍之介、井伏鱒二、太宰治らの文学の性格と関連して、大逆事件をきっかけに“ennui”の訳語として「倦怠」という語が知識人間で広まり、次第に俗流化・大衆化したという趣旨の発言を行っている。熊谷孝『井伏鱒二：講演と対談』東京：鳩の森書房、1978年、130～133頁。

43 「倦怠」、121頁。

自殺の端緒すらを見つける途がない今の私の生活は、果たして倦怠の極、倦怠そのものだ⁴⁴と振り返られることになる。「倦怠」による「自意識過剰」を経た「自殺」という、ここで想定される「現代人」としての在り方から完全に疎外された「今の私の生活」が、「倦怠の極、倦怠そのもの」として意味付けられている。

テキストの終わりの部分での、「どこまで行けば終わりになるか分からない明日、それが再び窓の外に待ち構えているのを感じながら、ぶるぶる震えているだけだ⁴⁵」という「私」の身体的反応は、「現代人」を象徴する「自意識過剰」が「閉鎖」された「倦怠の極」における、書き手「私」の主体の危機のあらわれとすることができるのではない。成川で日本語によって書かれた創作ノートや、それに基づいて朝鮮語で書かれた「山村余情」を、東京で、再び朝鮮語によって語りなおすという行為に際し、李箱は「倦怠」という漢語をテキストをまとめ上げる語として選び、「倦怠の極」における「現代」からの疎外と、それに伴う主体の危機を描き出した。農村での「倦怠」を、その「極」に至るまで描ききるという「倦怠」というテキストに見られる語りなおしは、「山村余情」で夢見られた「都会」的な(そして植民地的でもある)ホモソーシャルリティが到底機能しえないような場所としての東京に、李箱が到達していたことを示唆しているように思える。

4 おわりに

ここまで見たように、李箱は1935年の成川旅行経験を日本語によって書き留めた上で、それを朝鮮語によって語りなおすことで、「山村余情」と「倦怠」という全く異なる2つのテキストを生み出した。2つの朝鮮語テキストはそれぞれ独自の言語、文体、論理を持つが、本発表では日本語草稿の原文を可能な限り復元・利用することで、その語りなおしという行為の持つ意味への接近を試みた。

京城の植民地知識人であった李箱にとって、様々な点で新鮮であったに違いない成川という農村での経験は、まず「山村余情」という紀行文風のテキストに結実する。「山村余情」は、書くという行為そのものによって「都会」と「山村」という領域を対立的なものとして区画しつつ、「都会」におけるホモソーシャルな解釈共同体を構想しようとするテキストであった。一方、東京への幻滅の中で書かれた「倦怠」は、「倦怠」という近代の日本と朝鮮の知識人の間で特別な意味を持って流通した漢語によってテキストそのものを統制し、「現代人」的な「自意識過剰」へと導かれえない「倦怠の極」における主体の危機を描き出す。

成川という農村の経験によって立ち現れてくる「都会」あるいはモダンを見つめ、日本語による素材を用いて朝鮮語の文体を作り上げようとする李箱の文学の言葉の動きを、本発表では捉えようと試みた。李箱自身の移動と連動する形で書かれた「山村余情」と「倦怠」という朝鮮語テキストの底辺には、モダンという近代性と日本語とが絡み合いながら横たわっている。創作ノートを通じて見ることのできる日本語から朝鮮語への語りなおしは、植民地下のモダンという現象に対して、どのような位置に立ち、どのように語るかを模索しつづけた李箱の文学の営みの一端を照射するものだと言えるだろう。

44 同前、127頁。

45 同前、128頁。